

資料 12

救急医学に関する研究教育制度の確立について（申入れ）

日本学術会議議長（文部大臣・厚生大臣あて）
昭和51年11月4日

次の事項について格別の配慮の上、その促進について早急に十分な措置を講ぜられたい。

1. 医学部において、救急医学の研究と教育を行う体制を整備すること。
2. 卒後教育において、救急医学指導者として十分な知識・経験を有する医師を養成すること。

近年における医学の発達は極めて著しいものがあり、各個別の分野における研究の成果は日進月歩の状態にある。しかしながら、医学は元来最も総合性を必要とする学問であり、医療はその上立って行わなければならない。

特にその中に在って、救急医療の問題は社会的にも大きな関心となっているにもかかわらず、それに対処する面で多くの問題をはらんでいる。

人類の福祉に貢献し、また生命の尊厳を守護する上で、急激に発展・悪化し、たちまち生命の危機にひんする疾患及び症状に対して、即刻その状態を把握し直ちに適切な処置を施し生命の危急を救うことは、医師の使命である。救急医学の知識は、広い専門分野にわたり、それを具備することは必ずしも容易でない。しかしながら、医の倫理上からも医師にはそれを具備する責務がある。

社会生活の近代化、都市集中化、交通機関の高速化は、集団外傷、集団事故の多発を招き、天災による大災害の際の救急医療の様相を大きく変換しつつある。

また、内科的救急疾患として、脳卒中は依然として我が国死亡率の第一位であり、更に食生活の欧米化に伴い、虚血性心疾患の若年死亡率も欧米なみになろうとしている。

その他の領域でも緊急な処置を必要とする疾患は少なくない。

このような状況へ全般的に対応し、社会的要請にこたえるためには、その基盤をなす救急医学の研究と教育を促進することが緊急かつ重要である。

救命については、(1) 医学教育機関における救急医学教育の充実、(2) 救急医学の促進、(3) 地域住民及び行

政当局の救急医療に対する理解とその協力、(4) 地域医療機関の救急に対する設備、(5) 情報通達網と救急輸送機関の完備、等の諸事項の解決が緊急である。

しかるに日本の現状は、上記諸点のいずれも欧米に比して未発達・無統制のそしりを免れない。なかでも救急医学の研究教育の面で、

- a) 救急医学は、その大部分が実践を伴う教育訓練であるにもかかわらず、大学医学部において救急医学の臨床教育を必須科目として取り入れ、その教育を行っている大学は1、2を数えるのみである。したがって、医学部卒業の時点で欧米なみの救急医学の知識と経験をもつことは困難である。
- b) 救急医学に関する卒後教育も貧弱であり、救急医学に関する広い知識をもつ指導者が少ない。
- c) 救急医学に関する総合的な研究を行っている機関は皆無といってよい。

など顕著な顕れが見られる。

以上の諸点にかんがみ、早急に適切な措置をとられることをここに申し入れるものである。

資料 13

リハビリテーションに関する教育・研究体制等について（勧告）

日本学術会議（総理大臣あて）
昭和52年5月23日

何人も人間として生きる権利を有することは、憲法も明らかにするところである。戦後30年の今日、心身の何らかの障害のために、人間として生きる権利の行使を妨げられている人々について、その権利の回復、すなわち、その「全人間の復権」を図ることを理念とするリハビリテーションの重要性は一層増大してきており、また、リハビリテーションの技術的進歩の成果も著しい。にもかかわらず、その成果を、それを必要とするすべての人々がいつでもそれを必要とする時に、容易に享受することができるための体制は、極めて不十分である。

とりわけ、リハビリテーション活動に従事する専門的教育・訓練を受け、広く社会や人間に関する理解を基礎とした人間性豊かな職員の十分な確保とそのための資格制度の確立、その職務にふさわしい待遇の改善、教育・研究体制の整備は、このような国民的要求にこたえるための緊急の要務であると考えられる。

よって、本会議は、政府が次の諸点について必要な措